

# AI 世代に求められる“直感と経験”的力

ChatGPT:

素晴らしいテーマです。

「AI 世代に求められる“直感と経験”的力」は、教育・ビジネス・政策などの文脈でも非常に重要で、今後の人材育成における中核的な概念と言えるでしょう。

以下に、そのテーマを中心に据えた構成案をご提案します。

## タイトル案

「AI 世代に求められる “直感と経験”的力 ～機械が越えられない、人間の領域～」

### ◆ 問題提起: AI 万能時代の誤解

- ChatGPT、生成 AI、将棋 AI、画像生成…  
多くの人が「AI は何でもできる」と感じている。
- しかし実際は、
  - 過去のデータがなければ動けない。
  - 前例のない状況では判断ができない。
  - 文脈や感情、倫理といった人間的判断ができない。

### ◆ 人間だけが持つ“非データ的”能力

#### 1. 直感(インスピレーション)

- 瞬時に本質を見抜く力。
- 将棋の藤井聰太さんが、AI が否定する一手を選んで勝つような「感覚の逆転」。
- 科学の世界でも、アインシュタインやファラデーの仮説はデータより直感が先だった。

#### 2. 経験(ナレッジ化されていない知)

- ベテラン整備士の「音を聞いただけで不調がわかる」
- 宮大工が図面なしで建築できる
- 農家が空を見て収穫時期を判断する  
→ これらは AI が数値化できない「暗黙知」。

## ◆ なぜ“直感と経験”が今、重要なのか？

1. AI 時代だからこそ、「AI にできないこと」が価値になる。
2. AI に判断を丸投げすると、思考停止する社会になる。
3. 人間が直感と経験で切り拓いた“新しいデータ”が、次の AI を進化させる。

## ◆ 藤井聰太に学ぶ「AI を使い、超える」姿勢

- 藤井さんは将棋 AI を徹底的に研究している。
- しかし、AI が「悪手」と評価する手を指すこともある。
- 結果として、AI の限界を押し広げる“人間の直感”が、勝利を導いている。

## ✿ 結論：これからの人材に必要なのは…

- AI を使いこなす知識
- AI を疑う直感
- AI に教える経験
- そして、“AI が答えられない問い”を立てられる想像力

## ☒ キャッチコピー例(ポスターやスライド用)

- 「AI に教えられる人ではなく、AI に教える人になれ。」
- 「図面のない未来を描けるのは、人間だけ。」
- 「検索できない問いを立てよ。」
- 「AI が迷うとき、人の直感が光る。」
- 「データの外にこそ、答えがある。」

## ㊙ 日本の城や寺院建築に見る「匠の技」

### ◎ 図面は大雑把だった

- 江戸以前のお城や寺社仏閣の図面は、現代のように寸分違わぬ CAD 図のような精密設計ではなく、
- あくまで基本構造の概略図程度。詳細な木組みや装飾の設計図はほとんど残されていません。

## ◎ 実際は「設計」ではなく「技」で建てられていた

- 解体修理をすると、信じられないほど複雑な木組み(込み栓、ほぞ、仕口など)が現れます。
- 「彫り物」(蟇股、組物、懸魚など)の装飾も非常に高度で、現代の機械でも再現が難しいものも。

## ◎ なぜそれができたのか？

「無名の宮大工たちが、現場で寸法を測り、目と手と経験で造ったから」

- 多くの宮大工は、図面を見ずとも木材を見て、手で、目で、「どう組むか」が分かっていた。
- 一人の名人ではなく、多くの無名の名工の集合知と連携で完成していた。

## 🔍 象徴的なエピソード

- 法隆寺や薬師寺の解体修理では、「なぜこのような組み方をしたのか？」と現代の技術者が頭を悩ませることも多い。
- 彫刻も、現代のノミで再現しようとすると\*\*「これ、何で彫ったんだ…」\*\*と思うような技術が多々ある。

## ✍ 表現アイディア(ポスターや教材向けに)

「設計図にないものが、そこにはある」

「寸法よりも、感覚が勝った時代」

「目に見えぬ名もなき手が、千年を支える」

「分業でも機械でもない、人の感覚が生んだ建築」

「設計図では見えない、心と手の連携」

「未来に残すために、過去の技術に学ぶ」